郷土マーメイド

逗子市立図書館報
第 28 号
2025 年 2 月 1 日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子 4-2-10
046(871)5998
https://www.library.city.zushi.lg.jp

藤原　楚水

逗子フォトより　逗子の自宅にて

「略歴」

明治十三年大分県豊後高田市生まれ。本名藤原喜一。楚水は雅号。関西大学、明治大学で法律・経済を学び、明治三十七年実業之日本社に入社。長年編集長、理事を歴任、昭和三年に退社。昭和五年逗子町会議員を一期務める。その後昭和七年三省堂に入社。顧問に就任。著述を主とする傍ら、東京学芸大学、横浜国立大学、駒澤大学に於いて教鞭をとり生涯東洋美術史、中国書道史などを研究、関係著書も多数出版。

「功績」

文化教育等功労賞　（昭和 34 年）
書道文化功労賞　（昭和 40 年）
逗子市教育委員会表彰　（昭和 48 年）
逗子市長善行表彰　（昭和 48 年）
神奈川文化賞　（昭和 54 年）

書道功労賞（昭和55年）
総理大臣賞（昭和55年）

神奈川県知事、逗子市長に満百歳を祝されて
（昭和56年9月撮影）
出典　藻塩草ー随筆ー　第2版ZF 914.6 フ

「近くにはまだ家は一軒もなくて、前の川は深く、舟がおいてありました。水道もなし。東京から帰ってきて、井戸水を汲んで風呂をわかすのが大変だった。飲み水は山から買ったが、そのうち水なんか買うのはいやだという意見が多くなって、水道を敷きました。その世話は当時町会議員だった私がやりました。いろいろ揉めて二年がかりでしたよ。」と語っています。

出典『手帳3』手帳の会　P051テ3

昭和五年に町会議員を一期務め、その後も逗子内外の著名な方々と交流を深めていきました。生涯漢籍に囲まれて執筆を続け、亡くなるまでの約八十年間を逗子で暮らし百九歳で亡くなった時点で男性長寿日本一でした。

昭和六十年十月に藤原楚水の著作物などを集めた【藤原楚水文庫】が逗子市立図書館に開設されました。『支那南画大成』『書道金石学』や逗子、葉山の昔のようすを伝えている随筆集『藻塩草』などが所蔵されています。

「逗子での生活」

楚水が逗子で最初に住んだ場所は新宿三丁目の高橋商店の貸家でした。明治四十三年頃です。その後大正九年に逗子七丁目に移りました。

「藻塩草」を執筆した経緯

「私は今既に齢九十を過ぎたが幸いに健康で、近ごろ『図解書道史』五巻を完成したばかりであるが、また次の著述に取りかかっており、朝夕は海岸を、時にはまた町はずれの山道をも歩き廻っており、ひまがあれば画もかけば字も書いている。ある時、逗子書道協会の中村松堂、菅原梅峯氏に『逗子のために何かしたことはありますか』と問われ、そのことをきっかけに記憶を辿り四五の思い出を書いた。それが動機となり、逗葉の昔の事について書いて見ようという興味が湧き起った。

逗子や葉山は旧くて新らしい町である。この土地に同時に住んでいた人も或は物故し、又は他に転居せられ、土地の老人も多くは道山に帰り、私などがいつの間にか最年長者といったところになっておる。その知るところを記録し置くこともまた意味がなくもあるまいと。これがこの回顧録を綴るに至った機縁である。」

『藻塩草―随筆―第2版』P914.6フ
はしがきより

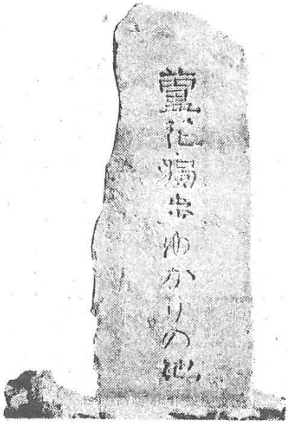
藤原楚水が市内に残した揮毫（きごう）

◎「郷土資料館」の看板

昭和五十九年七月に市制施行三十周年を記念し、桜山八丁目地内に「蘆花記念公園」が開園しました。この高台に逗子ゆかりの文学・歴史・民俗関係の資料を多数展示した郷土資料館があります。その玄関に掛けられている「郷土資料館」の文字は藤原楚水の揮毫です。

郷土資料館は令和二年三月閉館

◎「蘆花独歩ゆかりの地」石碑



富士見橋近くに「蘆花独歩ゆかりの地」の石碑があります。

明治の文学者徳冨蘆花が逗子で過ごした四年間を宿（柳屋）にしていたところであり、国木田独歩が新婚の数か月を過ごしたところでもあります。柳屋は、昭和二十九年一月に焼失し、その後昭和三十六年藤原楚水の揮毫による記念碑が建てられました。

◎「蘆花之故地」浪子不動前の板碑

浪子不動（高養寺）は、徳冨蘆花の小説『不如帰』の舞台となった所で、徳冨蘆花にゆかりの深い地であることを記して、昭和五十二年四月版碑に揮毫しました。裏面の文字は二女の藤原英さん（号青霞）がしるしたものです。

「広報ずし」1990年　4月号

「書道の研究を志すまで」

父親は楚水に家をつがせて百姓にするつもりでした。しかし楚水は農業の合間に伯父の家にある四書・五経・史記を読み、わからない所を何としても理解したいと思う向学心に燃える少年でした。

農業を手伝いながら独学していた十三歳の時、豊前中津の自性寺という寺に池大雅の書画何十点か所蔵してある事を知り、それを見る為に豊前中津まで朝暗いうちに出かけ、片道約二十六キロの道のりを往復しました。それほどまでに楚水は書画に強い関心を抱いていました。

実業之日本社記者時代には古書店で大束の拓本類や葉昌熾の『語石』十巻本を購入し、仕事以外の時間をこの書の和訳に費やし、退職後の昭和四年『支那金石書談』として自費出版しました。この書の発刊は書道界に藤原楚水が重鎮となるきっかけを作りました。

この後「自分の病」と称して書道の研究を一層深めていきました。

『手帳3』P051テ3より

逗子の自宅にて（寄贈写真より）

「主な著書」

『支那金石書談』「支那南画大成」「寰宇貞図石図」「書苑」「名碑帖通解叢書」「書道金石学」「中国書道史」『図解書道史』「註解名跡碑帖大成」「鄰蘇老人書論集」「書譜続書譜之研究」「六體大辞典」「芸術草書大辞典」「語石第一部」「名蹟法帖叢書」「澄清堂帖」「古詩・律詩選」「藻塩草」「三省堂を語る」

所蔵の本は太字

「主な参考資料」

『手帳3』手帳の会編集 手帳の会 P051テ3

『逗子町誌』小林章二他編 逗子町 Z29.Z ズ

『逗子町誌 改訂』改訂逗子町誌刊行会編集 逗子市 P213.7 ズ

『三省堂を語る-創業からの七十年をふりかえって-』亀井寅雄述 藤原楚水筆録 三省堂 023 カ

『藻塩草-随筆-第2版』藤原楚水著 省心書房 P914

『逗子ところどころ』森谷定吉 モリヤ P213.7 モ

『文学にみる「逗子」』森谷定吉 モリヤ P910 モ1

『広報ずし 1989-1991』逗子市市民相談室編集 逗子市 ZG31.Z コ89

『逗子市郷土資料館』逗子市 逗子市Z70.Z ズ